

〔上るり〕 蠅宮たる狗苟と、韓非に載せられし、巻尾けんてい自ら、此身にうけて浅ましや
〔歌〕 我も北斗を拝しては、心の儘に姿をも、うつすや池の水鏡、かつぐ玉藻に梳る、其の
通力も忽ちに

蘭奢の香の馥郁と、薫に恐れ本性を
見るにはこはさも忍ばれず、野干の形あらはせし

はかな己が有様や

野末の草の葉がくれに、葛の恨みの恨めしく、親の讐をうつつにも、夢にも忘れやるかたも、
泣いてあかしくてくよくよと、焦がれて燃ゆる狐火は

ほむらと成りて去りやらぬ、煩惱の犬に如何にせん、絆につながれ纏はれて、伏して見寝て
見執着の尚去りやらぬ思ひにより

我は化けたと俤を、慕ふにあまる口惜しき、報はんものと立よれば
毛衣さつと振乱し、眼鏡に息まきし、寄らば喰はん勢に

ぱつと飛び退き振返り、エ、言ひ甲斐もなき、涙の雨のはらはらとはつと、日に添ひてかかる
憂き事なき身ぞならば、花を飾りて品繕ふて

嫁入り嫁入り里の子に、囃したてられしつぽりと、露のかごとを草枕、独り葎の床の内
寝むるとすれど犬墳の、ちやつと起立ち身をふる尾花

此方は尾を巻き覗ひ寄る

寄せじと哮れば

飛退いて瞋恚の剣

憤怒の牙

研立て

研立ていどみあふ親の別れの其の場より、所定めずうろろと、恋し床しはさながらに
人間よりも百倍の、思ひ重なる胸の内

あだも報も白真弓、犬追物や

鼠畏かかるも知らぬ輪回到ひかれ

ひかれひかれて

爾は言へ親の恨みのしもと、菊をつとつて打つてかかれど

寄せつけず、貞女を守る張然犬、揚清季信が犬とても、かくは非じと耳逆立て吼ゆれば

叫んで駆向ひ

追つ

返しつその風情、去のうやれ我が故郷へ戻ろやれ

その名玉をと立かかるを、頼賢やらしと引止むる

千枝狐が帰り咲き、姿の花や六の花、木毎の花の顔見世は、目出度かりける次第なり